

しかし、彼の逆境は先づ之を以て終りを告げたものと見てよからう。其の不屈の精神は終に此の牢獄を脱け出す機会を作つて、フサインと共にアム河の上流地方に逃れ、此處に再び勢を養つて追捕に向つた王軍を敗り、漸次故郷ケシュの町に近寄つて來た。あらゆる艱難を嘗め盡して今漸やく再び故郷の空を眺み得るには至つたものゝ、町は勿論王家の治めて居ることであるから、直ぐにはそこに入つて懷舊の情を遣ふことも出来ぬのである。此の際ケシュ乗り取り策として彼の用ゐた軍略は、彼の得意の奇兵であつた。僅か二百騎ばかりの兵を四つに別け、數人の大將に之を率ゐさせ、各兵には馬の兩側に澤山葉のついた木の枝を引きずらせて驀進させた。城中からはその爲に煽り立てらるゝ烟塵を見て大軍の襲來と曉り、逸早く陣を撤して退き、こゝに帖木兒は再びやす／＼その祖先の地に入ることが出來た。此の時王子イリアスはケシュから程遠からぬ所に陣どつて、帖木兒との間に一大決戦が行はれる筈であつたが、偶々父王トグルク・チムールがカシュガールで没したとの報知を得て、軍を收めて歸つたので帖木兒は之を追撃して北上し、屢々之を敗つて終にサマルカンドをも占領することになつた。尤もこれは彼一人の事業ではなく、他の多くの領袖等と連合して收め得た結果であつたが、今かくの如くにして王を追ひ拂つてからは、彼等は皆自己の權力を掣肘せらるゝことを恐れて、皆各々獨立の行動を執らうとしたが、彼の機略は此の時の危機を見て取つて、直ちに領袖會議を催はし、此の際王を擁立しなければ自衛の道なき旨を論じて、遂にやはり成吉思汗の後裔なるカピル・シャー・オグランといふのを立て、其の位に据えることにした。しかし實權は勿論帖木兒と、彼の義兄フサインとの掌中に歸したのである。此の後は姻戚の關係あるにも係はらず、しふねく彼に反抗するフサインと對抗し、時には之が爲に敗られてボカラ、メルブと逃げまはつて、往年遁竄の有様を繰り返したこ